

私の民俗文化学 ——その来しかた行く末——

鍾 敬 文[※]

私の民俗学とのかかわりは民間文芸作品の採集から始まった。一九二〇年代初め、北京大学歌謡征集所（後の歌謡研究会）の近世歌謡の募集につられ、私も故郷（海豊公平鎮）一帯の民謡を採集し始めたのがきっかけだった。まもなく採集の範囲は一般の民間叙事作品（神話、伝説、昔話、世話話など）や他の民俗資料にも広がり、それとほぼ同時に私はこの野生の文芸に考察を加えるようになった。当時『歌謡』（週刊）に『歌謡雑談』を連載したのはその初穂だったと言える。当時考察に作ったのは主に文芸学的観点だった。それは、国内の民俗学にはまだあまり頼りにできるような理論上の成果がなく、外国の学説の紹介も始まったばかりでまとまったものはなかった一方、文芸理論については伝統的なものも新しく外国から取り入れたものも含めて、私自身にいくらかの知識があったからだ。

一九二〇年代後期、私は民俗学関係の興味を広げていくだけではなく、関係他学科の知識も次第に拡充していった。私が当時接触したのは、主に十九世紀後期のイギリス人類学派の民俗学理論であったが、そのほかにマルクス主義の学者による社会学、人文学関係の学説もあさり始めた。しばらくするとフランス社会学派の文化理論にも興味を抱き、吸収した。その一方で同時代の記録や古代文献などを通して更に多くの民俗事象と接し、自分なりの考えを持つようになった。それが「民俗を文化現象とみなす」という観点の基礎だった。

私がこの観点を研究に応用したのは、一九三〇年前後、当時私は杭州浙江大学文理学部で教鞭をとっていたのだが、「山海経」の研究をしていた時期である。私は「山海経」の中に見られる古代の様々な事象（神霊、祭祀、予兆、巫術、原始医薬術、自然神話、古代の英雄及び帝王伝説）を整理し論述を加え、著作の題は「山海経の文化史的考察」（略称「山海経研究」）とした。しかしこの本は後にいろいろな関係から、書きあげた一部分の章（「山海経とはいかなる書物か」、「中国古代民衆の医薬学」など）しか発表できなかった。しかしその署名から「民俗を文化現象とみなす」という意図ははっきり読み取れるだろう。これが私のこの方面に対する観点の始まりである。

その後二、三年して（一九三三年頃）私は民俗資料を採集している張清水氏が記録した口頭故事集（「太陽と月」）の序をものしたが、そこで故事の中にある様々な原始風俗と観念について（タブー、物体の変形、近親結婚及び個体が集団と入れ代わることの観念など）の文化的意義について指摘した。「……この故事集は文化史と文化科学の資料となり、……新しい時代を切り拓いていく学者にとって大きな意義がある」。この序文は発表時「中国神話の文化史的価値」と題した。

※北京師範大学中文系特別教授

それは「山海経」研究と同じ意味を持っているといえるだろう。

一九三〇年代の中頃、私は東京に留学し、原始時期と古代の文化史、民族学（民族誌も含む）、文化人類学等の著作を読みあさっていた。（その中には私の指導教官である西村真次教授の「万葉集の文化史的研究」もあった）。私の考え方はこれによってすこぶる豊富になり、「民俗と文化の関係」という観点は更にしっかりと固まってきた。

抗日戦争の一年前、私は杭州に戻り、教鞭を執るほか、引き続き民俗学についての研究と唱道を行った。この時期、私の思考は更に広がりを見せた。私は勤務校の「民衆教育」という月刊誌で「民間風俗文化」、「民間芸術」などの特集号を編集し、広く民間の風俗資料を採り挙げた（民間社会組織、民間医薬学等）。一方、「民間文化」という用語を創り、その方面の小さな資料叢書も編集した（十巻の予定だったが、「老東嶽廟会調査報告」、「浙江の民間戯劇」の二巻がやっと出たところで戦争のため中止になってしまった。これらは「山海経」研究以来の民俗についての観点が、研究の上で形となって表れてきたものである）。

一九三七年夏から一九七六秋までには、民族抗日戦争、民族解放戦争、十七年間の建国、文化大革命など幾つかの時期があった。私は抗日戦争の初めのころにしばらく前線の仕事に従事した他は、ほとんど大学の中で過ごした。この長い期間、私は研究作業から完全に離れたわけではなかった。「民間文学」の授業を受け持ったし、「民族季刊」（中山大学民間文学研究所）、「民間文芸集刊」（中国民間文芸研究会）などの刊行物の編集にも携わった。また、民間文芸に関する論文や随筆も発表した（「詩と歌謡」、「民間風刺詩」及び数篇の清末民間文芸史論文など）。しかし、時勢の制約や、意に添わぬ境遇のため、学術活動と思想はほとんど表現することはできなかったところか、ひどい抑制を受けた。僅かな例外は、新中国建国初期「民間文芸集刊」に「口頭文学—この大いなる民族文化財—」と題する論文を発表したくらいだった。ここでは題名にもはっきりと民間事象（口語文学）を文化現象とする観点を掲げているが、この時期に書いた文章としては珍しいものだ。これは以前の観点のわずかなきらめきと言えらるだろう。

天は中国を助けたもうた。四人組はついに打ち倒された！

あらゆる社会現象と同じように、学術も活気も取り戻した。長期にわたり禁固されていた（特に思想上）我々知識分子は、自由を取り戻したのだ。この春の空気の中、我々はまた教室に戻り、のびのびと存分に筆をふるい、学術機構を再建し、各種の学術討論会を開き……。この二十年来、学術の領域で、我々はあの時期には敢えて想像もできなかったことをなした。

七〇年代後期、仕事を取り戻してからというもの、私は論文、随筆をどんどん書き、口頭の発表や講演も数多くこなした。その中で私は再三民俗と文化の関係について採り上げた。この時期には時間の経過と個人の経験、知識の増加により、私が一九三〇年代から長い間暖め続けてきた観点の明らかな深まりが見られる。

民俗を文化現象とみなす観点は、このように次第にはっきりと強いものになっていたが、この時点では、民俗文化学という独立した学問として扱うべきだという意識を持つには至っておらず、

まだこれを太らせる時期だった。

時は満ちた。果実はついに熟したのだ。

一九八九年は政治・文化史上大きな意味を持つ「五四運動」の七〇周年だった。記念日の五月四日を迎えるに先立って開かれた中国社会科学院主催の国際シンポジウムに、私も出席することになった。私は「五四」時期当時の学術界が行った大衆文化に関する様々な学術活動を分析、総合し、概括的、創新的に説明を加えようと考えた。しかし、口語の昇格と方言調査、口承文芸の発見、大衆文学が文壇に位置を得たこと、風俗習慣の掘り起こしが始められたことなど、内容及ぶ範囲が広いから、それまで使っていた民俗学という用語ではその意味を完全には包括することができないように思えた。記憶に新しいことだが、八十年代中頃から終わりにかけて、我が国の学術界は「文化ブーム」とも言われ、文化の問題についてしきりに討論していたし、私も自分の専門の角度からこの種の学術活動に参加していた。(当時書いた幾つかの文章のほとんどは、後に「民間文化を語る」という小冊子<<人民日報出版社一九九〇年>>)に収められた。)またL. A. ホワイトの「文化の科学」や黄文山の「文化学体系」の類の著作を読み、大いに興味を持ったことなどの理由もあり、私はとうとう新しい学術用語を作るに至った。私は「民俗文化学」という新しい用語によって「五四」時期の大衆文化に及ぶ学術活動をも包括させた。このシンポジウムに提出した論文の題は「『五四』時期における民俗文化学の興起」であった。

ここでついでにそのシンポジウムの様子に触れておこう。この会議には大陸の学者のほか、アメリカ、ロシア、日本、台湾等の国や地域の漢学者が出席した。中国の学者のほとんどは「救亡圧到啓蒙」の類の問題について熱心に意見を交わした。私はこの論文を大会の席上で発表した。分科会ではこれといった反響はなく、国内外の何人かの学者が個人的に興味を示したにすぎなかった。しかし、当時の学界の雰囲気から考えれば、このように冷たくあしらわれたのも無理はなかった。

シンポジウムの後も、私は新たに提出したこの「民俗文化学」という学問の性質と構造、体系について考えていた。一九九一年、私は前後二回にわたり、民俗学学習会で「民俗文化学序説」と題した講演を行ったが、それは私の助手の董曉萍さんが録音をもとに整理し、「北師大学報」(一九九二)に載せられた。この文章は学界の注意を引き「新華文摘」に転載され(一九九三)、地方の研究者からも反応があった。

こうして「民俗文化学」は正式に提出され、この学問の構成についての青写真もできあがった。しかし十分な土台ができたとはまだ言いがたい。

民衆の精神的産物を含めたあらゆる風俗習慣は、それぞれの民族文化の欠くことのできない部分であり、それがどんなに様々な姿を取っていても、全人類共有の文化財産である。それは民族文化全体に基礎と補完の作用を及ぼす。すなわち民族のすべての成員の生活上必要な手段であり、規範である。ちょうど魚が水から離れられないのと同様に、誰もそれから離れて生きてい

けない。しかしそれにもかかわらず、我々のこの種の文化現象に対する認識・理解、特に科学的な研究は全く不十分である。

民俗文化学は民俗文化を研究する新しい学問である。それは木に喩えるとまだ立派な幹もなければ、枝葉も茂っていない。しかしその根は既にしっかりと張っており、生命力に溢れている。我々はこのすぐれて発展の潜在力に富む若木を育て上げなければならない。

私はこの新しい学問に大きな志を抱いてはいるものの、既に年若い精神的に限界がある。私には志のある人が民俗文化学の研究に心を定め、この新しい文化科学の木が速やかに育ち、やがて美しい林をなすよう力を注いでくれることを願ってやまない。これはこの世紀を生き続けてきた老人の心からの願いであり、また祖国の新しい時代の人文科学の発展と、民族の精神文明の建設にとって差し迫った必要でもある。

(北京師範大学大学院 高木立子訳)

鍾敬文教授95歳祝賀学術思想座談会

高木 立子

中国民俗学の創始者である鍾敬文教授の95歳を祝う座談会が北京師範大学の主催により、1997年4月28日、29日の両日に亘って北京師範大学で開かれた。

第1日目は北京師範大学アカデミーホールで、民俗学、民族学、社会学、人類学、歴史学等関係各界の長老級の学者たちを始め、各大学、学術団体及び国務院等の政府関係の組織からも代表を迎え、鍾教授の同僚、教え子、友人等もあわせて200人近くもの参加者による、盛大且つ和やかな祝いの会となった。主な発言者は東方学者の李羨林（北京大学東方学部教授）、哲学者張岱年（北京大学哲学部教授）、古代文学者であり書家としても有名な啓功（北京師範大学中国文学部教授）、歴史学者白寿彝（北京師範大学歴史学部教授）、民族学者林耀華（中央民族大学民族学部教授）、言語学・民族学者馬学良（中央民族大学少数民族学部教授）、歴史学者デイヴ・オウクス（アメリカアイオワ大学歴史学部教授）等で、1993年に行われた同教授の90歳の祝賀会に引き続き、再びその70余年に亘る学術思想の発展に対する纏めと評価が主な内容であった。その学問に対する態度、教師としての人柄及び文学創作（詩、随筆）と文学理論（詩論、文論）上の卓越した成就、更に一貫して力を注いできた中国民俗学と民間文学に於ける偉大な貢献等について惜しめない賞賛の辞が述べられた。

二日目は鍾教授が理事長を務める中国民間文化研究所に会場を移し、同教授の学生で既に中

国民俗学界に大きな影響をもつ鳥丙安教授（遼寧大学）、張振犁教授（河南大学）等を始め、代々の卒業生を中心に民俗学、民間文学、人類学、社会学等の研究者による討論が行われた。

鍾教授は中国民俗学、民間文学の創始者の一人として今もお現役で後進の指導に当たっているが、参加者は同教授のこの学問に対する思想のたゆまざる発展がそのまま学界の発展の大きな推進力となってきたこと、特に近年提唱している民俗文化学は不断の発展のあかしであり、長寿の秘訣は学問上の常に前進する精神にあると述べた。そこから、それぞれの同教授との交わりの中から学び得た人間として研究者として取るべき態度について、更に同教授の詩作形と詩論に関して、熱心な発言が続いた。

同教授の詩作及び詩論は近年評論界の高い評価を得ているが、その特色は同教授の提唱する文化全体論による。これは中国の文化を上中下の三層により構成されていると見るもので、中でも下層文化の発掘は詩作において得るところが少なくない。すなわち詩の根源は民謡であり、その体質は抒情である、そして詩歌と民謡は常に共に発展してきたと考える。このように、民間の思想から中国の詩歌を論じたのは同教授ならではの貢献である。

最後に鍾教授は謝辞の中で、更に引き続き愛する民間文化の仕事のために努力を続けて行くことと述べた。なおこの座談会の模様は記念文集としてまとめて出版される予定である。